

不登校からひきこもりへ，その中で呈した青年の極度の退行（攻撃・甘え）の意味と自立への転機

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

本論文では，一人の青年男子の約 2 年余にわたる心理面接過程を報告し，不登校からひきこもりへという症状の中で呈した極度の退行（攻撃・甘え）に視点を置いて，それらのもつ意味と自立への転機について検討しようとするものである。

彼が著しい攻撃性を母親に向けたのは，不登校になった中学生の頃であった。その後ひきこもりに陥り，彼の攻撃性は甘えへと変容していった。

面接開始の時点で問題視されたのは甘えであった。しかし継続面接の中で，この甘えが受容されていくことにより彼の心底にあるのは怒りの感情であり，しかもその感情が未処理のままに残存していることが明確になってきた。

未処理のままということは，彼自身の怒りの感情がいまだに直面化されず，表出・表現されるという体験が育まれていないということである。そこで，怒りに焦点化した面接が必要になり，以後体験へと展開されていったのである。

今回の面接を実施するにあたって，筆者は退行（攻撃・甘え）の意味をより深く探究したいと思い，バリントの退行論に依拠しながら取り組んでいくことを考えた。

また面接の中での十分なラポールがついたと思われた時点で“アンガーワーク”という面接法を導入したが，これが契機となって青年は自立への一步を踏みしめることが出来たのである。

いみじくもバリントは，治療の中で起こる転機を“新規蒔き直し”と称しているが，筆者の事例では“アンガーワーク”を青年の自立へと促した転機に通ずるものとみなして，バリントの“新規蒔き直し”という概念と照合させながら考察することにしたい。